

風土



柿
の
花

神
蔵

器

畦塗つて一村涅槃月夜かな

芭蕉庵に晴れの集まるほととぎす

春月を上げて武蔵の大櫓

夏立てりルネ・ラリツクの砂時計

春遅々と心臓写すエコーかな

この村にのこる踏絵や麦の秋
生きのこる時計屋一つ柿若葉
ロケ隊を散らす筍流しかな
耳うちす茂吉の被るカンカン帽
天上に恋あり泰山木の花
燕来る九戸の谷戸のどの家も
わが家の家紋のごとく柿の花



竹間集

同人作品



しやぼん玉

徳丸 峻二

恋の猫上目遣ひに戻り来る
蛇穴を出て振りかぶる鳥の声
打水の母の背脅す下校の子
春眠や妻の寝言に返事して
初蛙競ひ鳴きぬて小町井戸
山葵田の兩岸に居て母子かな
しやぼん玉ジャングルジムを越えゆけり

初つばめ

宮川みね子

山吹の道万葉の歌つづく
原字者 四句
初つばめ六賢台の塔の空
筆塚の文字筆太に雀の子
音たてて楷の芽吹きや理想橋
猫の恋妖怪門の暗さかな
残花かな十七字詩へあと一字
夜桜の息づかひあび眠られず

ある日・その時(二)

浜 明史

卯波とほし動物園に人混み合ふ
黄糸びねに妻の起居を見るごとし
二十五年春に田中佐治氏の男 贈答集詩 即四句
妻と娘連れ来し剛菖蒲の日
新緑や剛の金齒光りぬて
てんごりの田植賑はふ日曜日
(てんご)は関東での(田植)と同感、田植之家に村中で助けたこと
突然の客にぼうまい古茶新茶
(ぼうまい)は当字では忙舞と書へ「読むかみへん」にて舞の意

さくらさくら

— 大竹 淑子 —

さざ波の近つあふみやさくら咲く
地に刷きし影淡々と糸桜
白川に触れて枝垂るるさくらかな
太閤醍醐にて七句桜幹に魅せられぬたりけり
亀島の松さゆらげりさへづれり
三石に川の三様囀れり
花満つや枕流亭に貴人口
花冷や奥宸殿の灯の昏き
水煙に触れて雲ゆく花の空
醍醐なる虚子忌のさくらさくらかな

子らの声残す運梯夕桜
夜桜の闇に濃淡ありにけり
夜桜や肌に染み込む闇ありて
月光に潮満ちくるさくらかな
たまゆらの闇に散りつぐさくらかな
思ひ出すことこまごまとさくらの夜
風速計速し戦友桜咲く
桜蕊降り流水のきらめける
花街のすだれ巻きあげ余花の天
花は葉に舞の宗家は路地裏に

山河集

同人作品



神蔵
器選

釈迦仏に甘茶虚子には一句かな
浦島草糸の纏れてしまひけり
これしきの母衣の重さに熊谷草
本陣の威を太梁に花明り
禅寺に拈華微笑の白牡丹

天野みゆき

山彦のかぶさり来たり植樹祭
麗かや山に腰かけ山忘れ
日の中を雨降る貴船濃山吹

小林 和子

昌栄都督

貝塚に先人のこゑ粉おろす
「飛鳥Ⅱ」宵に発ちたる桜かな

ころ合ひの風添へて売る風車
息止めて見るや片寄る峽の蛸蚪

本間 羊山

野を焼いて火の神の舌ちろと見し
鴨引くや水より胸をひきはがし
鳥風や河口離るる舟ひとつ

柴田 久子

柳絮舞ふむかし文士の住みし町
捨て鐘に柳絮舞ひくる寛永寺
春霖や傘差しかくる父母の墓
春深しうすきみどりのメロンパン
このワイン注ぎてもみたしチューリップ

林 いづみ

青丹よし大和国原花吹雪
春深む砂むらさきの時計かな
夏近し吉野懐紙を入れ替ふる
茂りかな四百年の太郎冠者
子燕や御油赤坂の連子窓

◇特別作品◇(抄)

春から夏へ

上村 葉子^{はこ}

蝶連れて手児奈歩みし道をゆく
真間川に沿ふ家々の藤の花
燕来るドイツ庭園に裸婦二体
囀りにふくらむ楠の大樹かな
白秋旧家「紫烟草舎」の八重桜
竹の秋真間の井夫の後にのぞく
万葉人の沓音たどり四月尽
再びの手児奈の里に春惜しむ

風土独語／神蔵 器



虚子句集置かれし駅舎ほととぎす

奥田 弦鬼

大聖寺の前書がある。大聖寺駅は北陸本線の金沢と福井のほぼ中間に位置しているが、石川県の南の方で福井県との県境に近い。山中温泉に至る北陸鉄道山中線への乗換駅としても知られている。

これは私の推測だが、大聖寺駅の待合室に置かれていた虚子句集は『小諸百句』ではなかったろうか。全集は俳句集だけでも四巻もあるのだとでも待合室に置けないであろう。『小諸百句』は昭和十九年小諸で詠んだまことに小冊子であるが、その中には

虹立ちて忽ち君のある如し

虹消えて忽ち看の無き如し

虹消えて音楽は尚続きをり

虹消えて小説は尚続きをり

などがあり、特に前の二句は直接三国の愛子におくった句である。思いがけず旅先で虚子句集、いかもこの句集が『小諸百句』であったとすれば、後に発表された小説「虹」の世界が美しくもせつなく作者の心にあざやかに浮かび上ってきたのではなからうか。

〈その時、ふと見ると、丁度三国の方向に當つて虹が立つてゐ

るのが目にとまつた。

「虹が立つてゐる。」

と私は其方を指した。愛子も柏翠もお母さんも體をねぢ向けて其方を見た。それは極めて鮮明な虹であつた。其時愛子は獨り言のやうに言つた。

「あの虹の橋を渡つて鎌倉へ行くことにしませう。今度虹がたつた時に……」

——中略—— 私もそこに立つてゐる虹を見ながら、其上を愛子が渡つて行く姿を想像したりして。

「渡つていらつしやい杖でもついで」

「え、杖をついて……」

「虹」より

虫出しのころがつてくる出世坂 鈴木 庸子

出世坂は愛宕神社正面の石段男坂のことである。八十六段、はるかに仰ぐほど高く、きつい石段である。

寛永の頃、ある日、増上寺を参拝した帰りにここを通りかかった三代將軍徳川家光が、山頂に咲く美しい梅の花に目をつけ、馬で取りに行くように家臣に命じたところ、あまりにも高く急な石段をおそれて誰一人動かなかつた。そんな中を讃岐丸龜藩の曲垣平九郎盛澄が進み出て、馬にまたがってこの急な石段を登りきり、山上の梅の枝を見事折り、しかも馬に乗ったまま石段を下り、將軍家光に梅の花を捧げた。家光はいたく感動され「日本の馬術の名人よ」と賞賛され、以来、重くもちいられ出世したことから「出世の石段」と呼ばれるようになったという。現在もこうした故事にあやかつて社員たちの出世祈願や受験合格などの参拝が多いそ

うだ。

俳句は一期一会、偶然の春雷を「虫出しの雷」と受取ったのは作者の確かな認識、「ころがつてくる」は感性、中七をすべてひらがなにしたのもよかった。「出世坂」も動かない。
(以下略)

風土集



神蔵 器選

大聖寺

虚子句集置かれし駅舎ほととぎす
春の雲山羊はたしかに笑ひけり
鈴懸の花イギリスの詩集手に

東京

奥田 弦鬼

松陰神社

落花舞ふ徳川お詫びの石灯籠
追分に名代の蕎麦屋葱坊主
姫街道三步の先の立夏かな
舌に解く八丁味噌や風五月
黒揚羽寺領の奥へ奥へかな
初夏の蛤塚に水のこゑ
牡丹に齡重ねて耳順かな
ベビーベッド組み立ててある春障子
虫出しのころがつてくる出世坂
束ね吊る馬の草鞋や亀鳴けり

東京

林 いづみ

川崎

鈴木 庸手

洞深き幹に芽吹きし桜かな
先生の異動誌面や花蘇枋
開帳に一山の鶯舞ひ出づる
城跡は木の芽怒濤の刻きざむ
種袋夜半の雷雨に目覚めけり
藩境を貫く大河花筏
藁ぶきの藁を糧とし齋さく
靄を裂く判官館の雉子かな
白鳥の帰り遅るるマタギ村
初蝶や村をめぐりし水の音
畦に乗る陽炎父の忌を修す
初燕やうやう晴るる高さより
雁帰るこゑひといろに湖と空
夕空のうつくしき口や花辛夷
手をとれば手のあたたかき花曇

盛岡

石崎 淨

秋田

工藤ミネ子

東京

禅 京子